

はしがき

高齢化の進展や疾病構造の変化に伴う慢性疾患患者の増加などによる医療費の高騰が大きな社会問題となっています。このような現代社会において、薬学、薬剤師に何が求められているのか、またどうあるべきかを考える端緒になればとの思いから、本書は、くすりと社会の関係についての歴史的な考察に加え、現代日本社会の医療保障制度についての基本的な内容をわかりやすく解説しました。

いつの時代でも病気のない社会はありません。それぞれの時代の社会のニーズに応じて、医学、薬学は発展してきました。くすりは「社会の要求に対応して生まれ、社会の変化に応じて変わっていく」といわれます。すなわち、くすりというのは社会の変化と非常に強くかかわっており、時代とともにくすりも薬剤師の職能も変化してきました。このようなくすりを科学する学問、薬学はどうあるべきなのか、あるいはこのようなくすりを扱う薬剤師は、どうすれば社会に貢献できるのか、その存在意義、使命は何かを考えるためには、常に社会の動きを知ることが必要です。

日本社会も急速な高齢化の進展と経済基調の変化に応じて、医療保障制度の見直しを図ってきました。医療環境の変化により、薬剤師の職能も今までの調剤、薬品管理といったモノを中心としたものから、ヒトを中心としたものへと変化してきています。このような時代にあわせるべく、薬学教育6年制がスタートし、薬学教育も大きく変わろうとしています。

現代のような社会の状況下、薬物療法においても「質」と「価格」によって薬剤を選択する時代になってきています。薬剤師も薬剤経済学的知識にもとづき薬物療法を評価し、患者や医療提供者に判断材料の提供を行うことが求められています。「最良の医療」を「最小のコスト」で提供するためには、薬剤経済学的知識が必要になってきます。薬学生には、薬剤経済学という学問があることを知ってもらいたいという思いから、第3章では医療と経済について国民医療費の動向に加え、薬剤経済学の基礎的な考え方について解説をしました。第9章では、より良いくすりを育てていくためには薬剤疫学研究が欠かせない

ということで、薬剤疫学の基礎についてわかりやすく解説しました。薬害についてはその原因を分析し、薬学を学んだ者としてあるいは薬剤師として何ができたかを、過去の事例を通して学ぶことが、これからくすりにかかわる仕事に就こうとする者にとっては、とても大切なことです。

また第10章では、諸外国の医療保障制度について、外国の医療保障制度に精通されている坂巻えみ先生に解説をお願いしました。国や社会環境の違いにより、様々な医療保障制度が存在しており、その背景の違いが薬剤師の社会的な立場や薬剤師職能の差にもつながっていることを理解してほしいと思います。この章での図表等の表記は、可能な限り英語、日本語の併記にしていますが、適切な日本語訳のない場合は英語のみの表記になっています。

本書がこれからの日本の薬学を担っていく若い人たちに、薬学の使命、薬剤師のあり方を考えていくよりどころになればと考えています。

本書の出版に当たり、法律文化社および田藤純子氏、舟木和久氏はじめ編集部の方がたに大変お世話になりましたことを深く感謝し、こころよりお礼申し上げます。

2008年2月

長嶺 幸子